【81】

氏　名（本籍）	星　野　睦　子（茨 城 県） （ほしの むつこ）
学 位 の 種 類	博　　士（芸 術 学）
学 位 記 番 号	博　甲　第　3628　号
学位授与年月日	平成 17 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	芸術学研究科
学 位 論 文 題 目	**国吉康雄研究** 日系アメリカ人画家の芸術と社会意識

主　査	筑波大学教授	博士（芸術学）	五十殿　利　治
副　査	筑波大学教授	博士（芸術学）	守　屋　正　彦
副　査	筑波大学講師	博士（芸術学）	直　江　俊　雄
副　査	筑波大学助教授	博士（文学）	宮　本　陽一郎

論 文 の 内 容 の 要 旨

国吉康雄（1889 － 1953）は若くして渡米し，同地で画家として成功し，数々の受賞を重ねた。戦後になって 1948 年にはニューヨークのホイットニー美術館で回顧展を開催し，ヴェニス・ビエンナーレの出品作家にも選ばれるに至るが，ついに帰化することなく没した日系アメリカ人作家である。日本でも，没後すぐに東京の国立近代美術館で遺作展が開催され，1990 年には岡山に私立の国吉康雄美術館が設立された。さらに昨年にはふたたび東京国立近代美術館で回顧展が企画されるなど，国吉の評価はますます高まっている。

日本近代美術史において，アメリカで活躍した画家は少なくないが，国吉に関しては，渡米後は父を見舞うために，戦前に一度しか帰国しなかった事実にもうかがえるように，画家としてはどこまでもアメリカを拠点とした作家であった。したがって日本の近代美術史上での位置づけは慎重に行う必要がある。

ところが日本においてはもっぱら「日本人」であることを前提にした「郷愁の画家」という画家像が長い間踏襲されてきたと著者は指摘する。その結果として，国吉康雄の芸術について強固なステレオタイプの評価が形成された。本論はこれまで見過ごされがちであったアメリカ社会への国吉康雄の政治社会的な運動への関わりについて，作品との関連をも考慮しながら，小沢善雄らによる先行研究や近年のアメリカ研究の成果を参照しつつ，実証的に迫り，従来の国吉康雄像に大幅な訂正を求めるものである。

本論は序章，第 1 章から 7 章，終章，そして参考文献ほかの資料から成っている。序章においては，まず本論の目的と問題設定を述べる。上でも触れた日本における固定観念を指摘するとともに，戦後のアメリカにおける反共政策により国吉康雄が置かれた複雑な政治的環境についても勘案して考察が進められることが確認される。つづいて，1948 年の回顧展以後から今日に至るまでの先行研究がまとめられ，問題点が整理され，そこから本論の課題が設定される。本論においては，1930 年代なかば以降，太平洋戦争期を経て，冷戦初期の時代までが考察対象とされる。また研究方法としては，とくに未公刊資料や関係者のインタビューが積極的に典拠となるとされる。

第 1 章「大恐慌と『アメリカン・シーン』絵画」においては，国吉康雄が政治社会的な意識を強く抱くに至る背景をさぐるために，1930 年代アメリカの大恐慌下における諸潮流，とりわけ「アメリカン・シーン絵画」

を中心に概観する。その上で，国吉の芸術を少数派の「アメリカン・シーン」と位置づけるとともに，それが危機の時代である30年代においていやおうなく政治性を帯びたことを指摘する。

第2章「アメリカ美術家会議の成功と挫折」は国吉康雄が社会参加と政治活動を開始する基点となったアメリカ美術家会議について論じる。国吉は反戦と反ファシズムの旗印のもとに多数の美術家が結集したアメリカ美術家会議の発起人のひとりとなって以来，同会で要職を担ったが，その実際の活動を跡づける。アメリカ美術家会議は，アメリカ左翼が人民戦線方式に転じて結成された背景があり，そのことがまたソ連のフィンランド侵攻による会議の破綻につながることになったが，国吉においては政治社会行動への契機となった点において見逃せないとみる。

第3章「1930年代左翼とニューヨークの日系美術家」はアメリカ美術家会議による展覧会に積極的に参加し，年次会員展に出品した日系美術家，すなわち国吉のほか，石垣栄太郎，多毛津忠蔵，トーマス永井，イサミ・ドイ，鈴木盛，山崎近道について，その出品動向を検討するとともに，関わりの深かったACAギャラリーの活動にも考察を加える。

第4章「太平洋戦争下ニューヨークの日系一世」は，太平洋戦争下における国吉康雄のアメリカ合衆国への戦争協力について検討する。国吉は真珠湾攻撃後のアメリカン・グループの長として行動を起こしていた。反戦活動を行った石垣栄太郎・綾子夫妻ら左翼の日系人グループとも交わっていた。こうした戦時努力の最たる例となるOWI（戦時情報局）から依頼されたポスターのための素描について考察を加える。

第5章「冷戦と『赤い美術家』たち」では，大戦後，アメリカにおけるいわゆる「赤狩り」と国吉康雄の関係について述べる。とくに1948年81回下院議会における共和党議員ジョージ・ドンデロが行った演説においては，そこで多数の美術家が左翼系であると指弾された。その矛先は最後にはモダンアートそのものにも向けられることになった。そうした攻撃の矢面に立ったひとりが国吉であった。アメリカ現代絵画の海外巡回展を中断させて，考えられないような安価で展示作品を売り払うようなアメリカ・ナショナリズムの台頭という背景について考察を加える。

第6章「抽象表現主義への反論」は，戦後に隆盛し，国際的にも広範な影響を与えた抽象表現主義に対して国吉康雄がどのような立場を取ったのかを考察する。ニューヨーク近代美術館への書簡を手がかりにして，モダンアートの先導役を果たした美術館と画家との関係を探った後，抽象表現主義に対抗した勢力として，雑誌『リアリティ』に着目する。同誌創刊号の声明には国吉の名も掲げられており，非抽象形式の存在理由の確認と人間性の重視を訴えられた点について論じる。

第7章「仮面の道化師たち」は，最晩年の国吉康雄の中心的主題となった仮面の道化師について検証する。道化師は戦前からすでに手がけられたテーマであったことを確認した上で，戦後の作品について，冷戦時代の社会状況に照らしつつ，同時代作家のベン・シャーン，フィリップ・エヴァーグッドなどの作例を比較対照し，国吉の仮面像について考察を加えている。

終章においては，これまでの考察を総括するとともに，さらなる作品分析，つまり作品と政治社会活動との連関等の残された課題について述べて，論を結んでいる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は日本において生まれてアメリカで評価されたということによって，表面的な理解が流布したために，画家と作品の本格的な検討が遅れていた国吉康雄について，とりわけ冷戦初期の政治的状況によって関係資料の意図的な隠蔽の可能性があるという，画家の政治社会的活動を中心的にして考察を加えたものである。

1930年代は大恐慌の世界的波及やファシズムの台頭等によって，美術家が政治社会といやおうなく向き

合う危機の時代であった。国吉においてはアメリカへの帰化不能外国人として，その政治的な立場は一層複雑で微妙とならざるをえなかった。それだけに彼の絵画表現には単純でない屈折が見られ，平凡な人物像や風景画であるようにみえながらもきわめて難解な作品となっている。

著者はアーカイヴス・オヴ・アメリカン・アートの未公刊資料をはじめ各種の基礎資料を渉猟して，国吉康雄はむろんのこと，その周辺の美術家，とりわけ左翼系の日系美術家の活動を丁寧に掘り返して，作品制作の背景となる国吉康雄の環境全体を浮彫にしようとしている。とくに国吉の転機として重要なアメリカ美術館会議関係の展覧会については，石垣栄太郎資料を積極的に利用して，日系美術家を含めて基礎的な事実関係を明らかにしており，今後の研究の指針を示したといえる。

本論文はまた戦後アメリカにおいて執拗な「赤狩り」に遭遇した国吉康雄を取り巻く状況を丁寧に跡づけている。戦前のアメリカ美術家会議への参加でさえも激しく非難されるような時代であったが，その荒波のなかで国吉が画家としての信条を保持して，そうした酷薄な時代へ突きつけた鋭い批評性を，同時代作家の作例を引き合いに出しながら，最晩年の仮面の像に読み込むことには十分な説得力がある。

さらに戦後アメリカ美術として世界的に喧伝される抽象表現主義の反共的な文化戦略についてはすでに論じられているが，そうした冷戦下の文化政策に対して，国吉康雄が抽象表現以外の非抽象的な美術形式の擁護と人間性の重視を求めて行動したことを検証したことも，単なるエピソードには終わらない事件の発掘として，モダニズムの展開ばかりを一面的に追いかけてきた美術史に修正を迫るものであると評価できる。

著者自らが断っているように，本論文においては，人物や風景とともに1930年代において一貫して描かれた静物画，あるいはこれと関連する写真についても考察する余地が残されているが，しかし，全体としては広範な資料収集と丹念な解読に基づき，独自の考察を加えた論文として高く評価できるものである。

よって，著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。